

---

# What is Life

rekuze

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

What is Life

### 【Nコード】

N2581X

### 【作者名】

rekuzé

### 【あらすじ】

いつも通り帰ると、見知らぬ少女がいた。

## 第一話（前書き）

どうもRekuzeeです。

小説書くの始めてなので、温かく見守ってください。文字ミス等あったら教えてください。

## 第一話

「やべ、遅刻だ。」

俺はそういうとダツシユで自転車まで行きそして出発した。

「綉護弁当忘れてる！」

俺は母親から弁当を受け取ると、全力で自転車を漕いだ。

あ、ちなみに俺は紅綉護って言う高校1年生だ。いやもうすぐで高校2年生だが：特徴はこれといってない。まあ人と比べると喧嘩が強かったこともあったが、ガキの頃の話だしなんにもない一般男子だ。

一応説明しとくが、今日は我が文化部の大会で、（用は他校との交流会）そのため大急ぎで現地に向かっている。ほら、言っているうちにバス停についた。

慶式「遅かったが昨日何してたんだ？」

こいつは去年から一緒の杉崎慶式という奴だ。顔はそこら辺の連中と同じ位で性格は優しいんだけど、重度のオタクになろうとしている奴で、時々意味不明の言葉や、ギギ ブラのまねをしたりと、こういうことをしなければ、彼女が出来るかも知れないのに：本人いわく運命的出会いをしないと云っているが、そういうことをしなければ出てくると思うんだが：

まあこいつの紹介は、ここら辺にしといて…

綉護「ゲームと二次ファン」

慶式「はい。それで何時まで起きてましたか？」

綉護「4時だけど」

慶式「なら寝てる。着いたら起こしてやるからよ。」綉護「そう、なら頼む」

そういつてバスに乗ると俺の多分この部活で慶式以外の仲良しだと思われる奴等を見つけた。

藍「おはよう。綉護、慶式」

綉護「おはよう。藍、薙」薙「よう。やけに遅いじゃん。」

彼女達は、流麗藍と市川薙、薙の場合は気軽に話せる友達でいい奴だけど、腐女子で、BLの悪口を言つと、ヤバいほど怒る。一応才一ル対応な奴

対する藍は、簡単に言つと、ほとんどがガキと同じで、なのにテストのときだけ頭が冴えるふざけた奴だ。綉護「藍悪いけど寝るから相手はいつも通り慶弔か、勇徒にしてくれ。」

勇徒「ああ？」

林藤勇徒こいつに関しては、高校になって会つた男だけど、昔の人見知りがあるおかげで、まだ馴染めないが…

重度の厨二病である。

勇徒「なんで俺が付き合わないといけないんだ。」

綉護「お前等いつもあいつの世話してるだろ。」

勇徒「不本意だ！」

綉護「まあまあいいじゃんか。お前だつて少しは嬉しいんだろ。」

勇徒「いや、こいつはガキだし、嬉しくない。」

藍「こらーガキつて言うなー!!」

とすぐに反応していつもものねこねこパンチみたいな攻撃を繰り出すが、悲しいことにダメージはゼロのようだ。

綉護「ということであんな寝るから(^^)ノ」

勇徒「おい！ちよっおま!!」

ああまた犠牲者が増えたな。

数時間後

俺は家に帰り、飯を食べて二階の俺の部屋に向かい、さあ〜て、今日もゲーム制作をしよう・・・

ガチャ

満面の笑みを放っている少女

誰だ？

俺には妹は居ないし・・・部屋片付けてないよ。どうしよう

知らない女の子「あなたに考える時間を与えるからその間に好きな

望みを3つ考えて。私があなただの願いを叶えてあげるから、その代わりあなたの魂を私に頂戴。もし渡さないとこのままあなたを殺しちゃうから。」

なんなんだ？この少女は、いきなり俺の部屋に入ってきて、黒いロブを被って鎌をもっていかにも私は死神ですよって言っているみたいじゃそれより、さっきの話をこの服装で信用しろと言っているのか。

それはあまりにもおかしい話だ。こんな話頭が逝っちゃってる奴が、似たようなことを体験した奴しか信じないだろ…俺は在ったけど…

俺は、どうにか突っ込みたい気持ちを抑えて慎重に話してみた。

・ 綉護「ええーと、取り敢えず君は俺の願いを叶えてくれると。」  
すると、少女はこくりと首を縦に振った。

綉護「その代わり俺の命をくれという訳だね。」  
また少女は頷いた。

綉護「君は死神さんなのかな？」

知らない女の子「うん！よく分かったね。」

綉護「まあな。取り敢えずお前の力をみてから判断したいんだが…」  
知らない女の子「うん！分かった。」

そう言うと少女は鎌を構え始めて…

綉護「待て待て、俺を殺す気か！！」

知らない女の子「だってみたいって言っから…。」綉護「いやまだ願いを叶えて貰ってないし、死ぬことを了承してないよ！」

知らない女の子「そう、なら…。」

そう言うと、少女はロブからレールガンを取り出して…

綉護「いや、出来れば海とかにしてくれませんかねえ？」

知らない女の子「いちいち細かいこと気にする奴だな。」

ということ、海に出て…綉護「さあ見せてくれ」

少女はこくりと首を縦に振り次の瞬間、地面に魔方陣が描かれ、黒いなかが出てきて、それが鎌に憑いたと思ったと同時に少女は空

を切り裂いた。

そして、穴が開かれ見たことがない風景が穴の中から…いやこれって世に言う地獄ってやつじゃ…

そして少女は、さっき捕まえた蜂を持ってきた。

知らない女の子「これを使います。」

そういつて少女は、鎌を構え、蜂を斬った。

すると、蜂からアニメとかでやるような魂が、鎌に憑いた。

そして少女は、蜂を手掴みしてこっちにきて、

知らない女の子「はい。」 綉護「いや刺されるだろ。」

知らない女の子「大丈夫だから」

そういつて無理矢理俺に持たせた。

綉護「あれ刺してこない？」

知らない女の子「魂がないから防衛本能も働かないんだよ。」

本当に気絶したように動かない。

これなら…

俺は、少女の近くに行き、そして…

綉護「俺の願いを聞いてくれ。」

## 第一話（後書き）

どうでしたか、面白くしていきたいので、意見どんどん教えてください。

## 綉護のプロフィール（前書き）

綉護のプロフィールです。一応載せておきます。

## 綉護のプロフィール

綉護のプロフィール

16歳高校2年男

4年前の事件の生き残り

髪はリトバスの恭介に似ている。

髪色は茶髪

昔は喧嘩が強かったらしい。

身長172cm

体重69kg

柔道、空手、剣道、弓道経験者ただし、型にはまるのが、嫌だという理由で辞めた。主人公のプロフィールはこんなところですよ。

他に知りたい方は意見お願いします。あなたの好きなのは、何ですか。

転校生キャラですか？

お嬢様キャラですか？

妹キャラですか？

幽霊キャラですか？

宇宙人キャラですか？

死神ですか？

この中に含まれるなら、この小説を読んでいくといいと思います。

## 綉護のプロフィール（後書き）

実は、文字数が足りなかった（涙）

その為、最後のあれを入れときました。

さあ次は、

第二話投稿です。こんな感じで進めていいのかな？

## 第二話（前書き）

二話投稿です。

## 第二話

次の日

母親「起きなさい！朝御飯出来てるからね。」

ふあああゝ・・・眠い・・・うん？なんか忘れてるような・・・

あ、

繡護「おい！」

母親「起こしに来て」「おい！」は無いでしょ！

繡護「あれ？」

あいつが居ない。昨日あれだけのことがありながら何で居ないんだ？

昨日（その後）

知らない女の子「うん！叶えてあげるから、言ってみて。」

繡護「まず一つ目として、『俺を3年後に殺してくれ。』二つ目は、

『ゲームのような最高の高校生活を送らせてくれ。』最後に・・・

『俺があんたに殺された後みんなの俺に関する記憶を消してくれ。』

これでいいか？」

そう、これは賭けだ。どうにかして相手に了承させないと叶えられない。

知らない女の子「三つ目以外は難しいよ。だいたい一つ目なんて殺せる確立下がるし、他の死神があなたを殺しちゃうかも知れないじゃない。それは却下よ。」そうくるだろうと思っただぜ。

繡護「それについては、お前が俺を監視すればいいだろう。それともなんだ、死神じゃないから守れませんか！所詮ガキには無理な仕事だな。悪かったよ。」ぶちぶち！！

知らない女の子「いいじゃない。やってやるですよ。それと私に向かつてガキって言うなゝ！！天罰だよ。」そう言つとこいつは、手から身丈を越えるハンマーを・・・

繡護「待て、話せば分かる。これは相手を乗らせる手段で・・・ジ

ヨークだよ。本当にそんなこと思ってないから。」

知らない女の子「問答無用!!」

綉護「あ、あー!!!!!!」

そこで俺は意識が途絶えて…なんでここにいるんだ。あ、昨日のは、夢オチか。疲れてるのかな…

???「おはよう!」

あれ?何でここにいるんだ?

知らない女の子「何よ。あんた挨拶も出来ないの?」綉護「いや、殺されかけた相手に挨拶はしないだろう。」

知らない女の子「あれはあんたが悪いんですよ。というより、思い出させてくれてありがとう。もう一発いっとく?」

つて、また身丈を越えるハンマーを取り出して…

綉護「本当に申し訳ございませんでした。」

知らない女の子「ふん。ならほら挨拶をしなさいよ。」

綉護「いや、名前も知らない相手に挨拶するのもちよっと…」

鴉莉紗「それもそうだね。まずは自己紹介としようね。私は篠煉鴉莉紗だよ。よろしくね。」

綉護「俺は…知ってると思うが、紅綉護だ。よろしくな。」

鴉莉紗「へえ、あんたって綉護って言うんだ。」

綉護「おい!ターゲットの名前くらい知るところぜ。」

鴉莉紗「名前も何も、魂の波長で綉護の魂を知って、手に入れようとしていたからいらないよ。」

綉護「魂の波長?」

鴉莉紗「そっか、綉護は知らないんだっけ?魂の波長って言うのは、生物の魂の精神力がどんくらい強いのか、誰に合うとか、そういうことを見れる代物なのまあいってみれば、その人第三印象みたいな感じだと思ってくればいい。そして綉護の魂がここの所見ないくらいの強い精神力があるし、若いから希少価値は高いからね。だから私は綉護の魂が欲しいからここに来た訳。分かった?」

綉護「そういうことか…」

あ、そういえば、昨日言い忘れてたんだけど、賭けをしない？」

鴉莉紗「賭け？」

綉護「そ、俺が消えてから3日の間に俺を思い出した人が居て、そして鴉莉紗が俺を生かすにたる人物か、見て受かったら、俺を復活させてくれ。」

鴉莉紗「・・・いいよ。そんな奇跡を起こすことが出来たら復活させてあげよう。絶対に無理だと思うけど・・・」

綉護「想いの力は、時に何もかも越える力を持つもんだ。だから、俺を忘れないと信じたい。」

鴉莉紗「思うのは自由だけだね。」

母親「綉護早く降りてきなさい。朝御飯出来てるわよ。」

綉護「ああ、分かった今行く。」

鴉莉紗「ついでに私は魔法を掛けてあるから、特定の人しか見えな  
いから。」

綉護「え、」

## 第二話（後書き）

前書きが少ないって？  
思い付かなかったので…

鴉莉紗のプロフィールです。(前書き)

鴉莉紗のプロフィールです。  
前回同様、文字数足りない…

## 鴉莉紗のプロフィールです。

年齢不詳の女の子

自称死神（確証が無いので）髪型はフードを被っているため分からない。

髪色は茶髪

身長144cm

体重女の子の体重を聞いてちゃだめだよ。

靴が魔女っ子アニメの靴を履いている。どこからともなく来た、自称死神の女の子誘護に契約をした張本人。アニメが好きな少女でもある。

ヤバい。また200文字以下だ…OTZ

プロフィール今度から2人ずつしよう…ハアまだ足りないの、僕のプロフィール紹介でも…レクゼのプロフィール作者でありこの世界では神でもある。

16歳高校生男子

ヤベ、これくらいしか思い付かない…OTZ

鴉莉紗のプロフィールです。(後書き)

次から話の下準備が始まります。

### 第三話（前書き）

遅れてすみません???

テストがあったので、更新出来ませんでした。

今日でテスト最終日なのでこれからは大丈夫です。

土日は更新はしませんが、気楽に見てください。

### 第三話

あれから三日後

鴉莉紗が、下準備をしているとか何とかで、霊界に行ってしまった。守るって言ったのに、ほったらかしいんだろっか？という疑問があつたが、気にしないであいつを霊界に見送った。

綉護「しかし何もする事無いな。」

今の状況を纏めると、この間買ったRPGを二日前にクリアして、しかもそれが、クリア後の楽しみが無いから暇になつた。

今はお金が無いから新しいソフトを買えないし・・・綉護「どうしたものかな・・・」

鴉莉紗「何辛気臭い顔しているの？」

綉護「バカ言え、俺は元からこういう顔だ。」

鴉莉紗「どうせ、ゲームをクリアしたから暇なんですよ。」

綉護「会って間もないお前に何故分かる？」

鴉莉紗「綉護の考えそうなことくらい分かるよ。」

あれ、鴉莉紗の耳元が光ってる。

綉護「鴉莉紗これ何だ？」鴉莉紗「ああそれは！」

《ああそれは！》

綉護「・・・鴉莉紗・・・この部屋に盗聴器でも仕掛けやがったのか。」

鴉莉紗「ごめんなさい。この部屋に監視用のデビルアイズを仕掛けちゃった。えへ。」

綉護「プライバシーの侵害じゃボケ!!！」

《プライバシーの侵害じゃボケ!!！》

鴉莉紗「うう・・・ひどいよ。耳に着けているから二重に声がガンガン響くよ〜(涙)」

綉護「自業自得だ。それで鴉莉紗は何をしにここに来たんだ？」

鴉莉紗「へ、・・・あっそうだ。そうだったね。綉護に今日から動

いてもらうよ。今日はある女の子に会ってもらうからね。」

绣護「女の子に会うって?」

鴉莉紗「そろそろ来るよ。」

父さん「おい。绣護ラーメン食いに行くぞ!」

绣護「ああ、分かった。今準備するから……鴉莉紗これでいいのか?」鴉莉紗「うん。これで運命が変わったよ。」

ちなみに、これから起こることは私は運命を変えてないから。」

绣護「っていうことは、変えたのもあるってことか?」

鴉莉紗「绣護に会うこと。それ以外変えてないよ。人が死ぬのは元々の運命だったし、私は補正をしただけだからね。」

绣護「とりあえず行ってくる。」数十分後绣護「父さん、ラーメンまだ?」

父さん「ああ、今日行くのは、最近できたうまいと評判の店に行くからな。楽しみに待っていてくれ。」

父さんラーメン好きだから……?日本のありとあらゆるラーメン店に行っているからな。今日みたいに連れていかれるのはよくあることだ。気にしないでおう。……うん、あれは女の子か?」

ダメだ。鴉莉紗に言われてから、女の子に注目してしまう。

これは、新しい何かが始まるからだろうか?

それにしても、あの目……どこかで見たような?

そうだ。あれは自殺願望者の目だ!

绣護「父さん止まって!」父さん「なんだ!?」

绣護「いいから早く!」

そうしている間に女の子は車の前に出てきて……

父さん「あつぶねえ!」

父さんが急ブレーキを掛けたが、車は急には止まれない。ぶつかる!!

そう思った瞬間

がん!!

車が止まった…

綉護「どう… なったんだ？」

俺はドアを開け、外を確認した。車の前には横たわっている女の子が…

綉護「大丈夫か！！」

鴉莉紗「大丈夫。当たる瞬間に私が車を反対側に引つ張ったから。」

その言葉を聞いた瞬間俺は綉護「はぁー良かったー。」

父さん「くっ、大丈夫なのか？」

あなたの方が大丈夫か？と言いたい所だったが、まあここは、言われた通りに説明するか…

綉護「大丈夫だ。この娘は当たる前に恐怖に怯えたのか、気絶しているだけだ。車に奇跡的に当たらなかっただけみたいだ。」

父さん「そうか… とりあえず起きるまで待つてみるか。」

数分後

女の子「うーん」

綉護「大丈夫か？」

女の子「え、ここは？」

綉護「ここは屋敷だ。お前の家みたいだったからあがらせてもらっただぞ。」

女の子「ごめんなさい。質問を間違えました。」

何故私は生きていますか？

綉護「それはお前がまだ世界に必要とされているからだろう。」

女の子「私が世界に必要？じゃあ世界に裏切られたとしても生きていなきゃいけないんですか？私にはもう生きている理由はもう無いのに死なせもしてくれないの？」

女の子「私を死なせてよ。死ぬ自由も与えてくれないの？そんなの嫌だよ…」

綉護「… ああ、とりあえず裏切られたと言ったが、何があったんだ？」

女の子「お父さんが亡くなった… 死亡原因は、小さな男の子を助け

だから…

私にはお父さん以外家族は死んだのお父さんだけだったのに…お父さんまで私を一人ぼっちにさせて…

独りはイヤ！イヤ！イヤ！寂しいよ。お父さんお母さん私を独りにしないでお願いだから。」

綉護「……それでお前はお前の父さんの後を追おうとしたのか。」

女の子「悪い？2人の所に行きたい。あなたには、赤の他人であるあなたには、それを止める権利は無いはずよ。」

綉護「権利は無いと思う。だが、助言は掛けさせてもらう。いや、お前は少し間違っているっていうことをな！！

お前の父さんは立派な人みたいだが、お前はただの死にたがりじゃねえか。どこの親も生きて欲しいと考えるに決まっているだろ！」

女の子「う、」

綉護「あと、これは絶対に聞けよ。俺はお前の兄貴になってやる！だからお前は独りじゃねえ。俺がついてやる。それならお前は寂しくないはずだろ！」

女の子「うぐ、……うぐ……ほ、本当に一緒に居てくれるの？」

綉護「ああ、一緒にいてやる、だから自殺なんてすんじゃねえぞ！そんなことされた日にはお前の父さんは死に足りないぞ……多分」

「ああ、死に足りないな。俺は未練が残って転生できないじゃないか。」

女の子「お父さん！！」

やっと来たか…まったく遅いぞ。鴉莉紗

「そんなに私たちのことが好きなのは嬉しい。だが、親としては、お前に死んで欲しくないんだ。分かるね。」

女の子「私は何を生き甲斐にすればいいの？」

このままじゃ私は生きていけないよ。」

「綉護君の所に厄介になりなさい。綉護君は頼りになる男だから私が唯一安心してお前を渡せる人ですから。そう、彼は4年前に私達

を救ってくれた英雄なのですから。』

女の子「綉護？」

『ほら、そこにいるのが…』 あ、だんだん藤宮さんの姿が透明になつてきた。早くしないと、

綉護「ああ、自己紹介を忘れたな。俺は綉護。紅綉護だ。久し振りで。藤宮さん。」

『綉護君、君には迷惑をかけてばかりでしたよね。すいませんですが、最後のお願いとして、娘の…愛実の兄になつてくれないでしようか？』

綉護「あつたりまえです。さっきの見てなかつたんですか？俺はこいつの兄貴になるっていつたんですよ。覚悟なんてとうにできてます。ただ父さんや母さんが許すか分かりませんが…」 『ああ、大丈夫です。さっきはなしましたから。了承を得てきましたよ。』

綉護「それなら断ることはないです。それと、藤宮さん。最年長として、皆を引つ張つてくれたおかげで俺達は帰つて来られました。今までありがとうございました！！（涙）」

『綉護君：ありがとう。そう思つてくれると嬉しいよ。さて、時間が無くなつて来たみたいだな。ということ、愛実…本日から君は紅家の娘だ。しかし、藤宮の誇りを忘れずに生きて欲しい。これが私の願いだ。私の後をついてくるのはまだ先の話だ。自殺なんて間違つてもするんじゃないぞ。我が一族の恥だからな。分かつたか？』

愛実「うぐ…うええん…う…うん…自殺なんてもうしないよ。だからこれだけは言わせて。」 『うん、なんだい？』

愛実「今まで…私を育ててくれて、私のそばに居てくれて…私を愛してくれて…ありがとう！！お父さん！！」

『うっ、うぐ、こちらこそ私を…』  
フッ

藤宮さんが消えた…

しかし、俺と愛実には聞こえた…藤宮さんの言葉が…好きで居

てくれて嬉しかったです。と  
後に残ったのは、泣き崩れた彼の娘と亡くなった仲間に敬礼をして  
いる青年だけだった・・・

2日後

3月31日

昨日正式に愛実が紅家の娘・・・俺の妹になった。

ちなみにここまで手際が良かったのも、鴉莉紗のおかげだったりする。

本当にガキの割に死神として、すごい奴なのかも知れないな。

・・・そしてこれから起きることは予想もしなかった出来事が立て  
続けに起こるとは考える余地もなかった・・・

愛実「兄さんなにしているんですか？」

绣護「ああ、日記を書いているんだよ。といっても別にこれは誰か  
に見られても構わない日記だけだね。」愛実「へー見せてよ。」

绣護「この日記を読むためには、残り3年の経験値が必要じゃ。」

愛実「ええーいいじゃない。見せてよ。」

绣護「ダメだ。」

愛実「ケチ。まあいいか。ところでまた兄さんに、一緒にシヨツピ  
ング連れてってだつて。今下にいるけど」

绣護「先に言つてよ〜」

まあ〜妹がいる生活も悪くないな。

つと、それより、客人の所に行かないと、多分あの人だと思つけど。  
・・・やっぱり、

绣護「ゴメン待たせたね。おーい！愛実一緒に行くぞー」

女の子「ふふ、绣護さん妹さんのことが好きなんですね。」

绣護「まあちよつとあつたしな。俺はあいつのこと妹として好きだ。

女の子「绣護さんのすごいところは、気にせず言えることですよね。」

绣護「なんか言つた？」

女の子「いえ、何も無いですよ。」

愛実「ゴメン待った？」

绣護「ああ、待ったぞ。」愛実「そこは、待ってないっていうことじゃない。」绣護「いや、俺を呼んだ時にもう着替え済ませてると思ってる…」

愛実「ああもう知らない。」

绣護「ゴメンな。俺が悪かった」

愛実「本当？なら服何か一着買ってね」

绣護「いや、そんなお金ないから」

女の子「あの〜そろそろ行きませんか？」

绣護「あ、スマン。とりあえず自動販売機で飲み物買ってくるから  
タタッ

女の子「愛実さんさっきの聞いてましたよね？」

愛実「何のことかな？」

女の子「绣護さんが好きだって言っていたこと。」

本当に彼は鈍感ですよ。しかも、こんなに胸がドキドキするのを言ってくるなんて、重度の」

愛実「それが兄さんですもん。今に始まったことじゃないと思うし、受け入れるしかないよ。」

女の子「ええ、本当に」

### 第三話（後書き）

はい。

第三話終了！

さあどうだったでしょうか？

最後の女の子は誰よ？

っていう質問はごもっともですが、それは第四話にて

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2581x/>

---

What is Life

2011年10月20日08時21分発行